

## 2002年 北海道大学山岳部デナリ遠征隊

### 《隊員》

リーダー：田戸岡尚樹 農学部森林科学科4年 21歳♂ 装備、会計  
Aリーダー；馬詰武 医学部3年 21歳♂ 渉外、保険  
メンバー：石川仁 理学部化学学科2年 20歳♂ 食料、医療

### 《行程》

5月27日出発	11日BC往復。Lのみ停滞
28日タルキートナへ移動	12日休養停滞
29・30日フライト待ち	13日再度BC入り
31日入山。LP (C○2100)	14日HC (C○5200)
6月1日C1 (C○2300)	15日停滞
2日C2 (C○2800)	16日登頂 (C○6194)、BCへ下降
3日C3 (C○3300)	17日休養停滞
4日荷揚げ	18日LP帰着
5日BC (C○4300) 入り	19・20・21日フライト待ち
6日休養停滞	22日タルキートナへ下山
7日荷揚げ	23・24日自由行動
8・9日停滞	25・26日飛行機で移動、帰国
10日C3へ下降	

## 前文

6月16日14時。我々AACHの有志3人は、Mt. Denaliの頂に達した。そして今、異常気象とも言える蝦夷梅雨の中あわただしい日常と戦っている。

山登りとは、終わり良ければすべて良しではない。山から帰るたびに、問題点・反省点をすべて洗い出して、今後に生かすことでリスクファクターを減らすことができ、つまりそれらは経験として個人及び集団の中に蓄積されていくのである。今回のデナリ遠征においても反省点は幾つかあり、新たな知見も得られたように思う。それらをこの報告書に示すことで、Roomとしての経験に置換されるはずである。

今回の遠征の目的は幾つかあったのであるが、第一の目的は、“デナリに登りたかったから”である。どうしてデナリかという質問をよくされた。Mt. Denaliの魅力というのが一番であるが、ルート of 難易度・レンジャー常駐・情報量など、初めての海外登山である我々にとって有利な条件が揃っていたというのもある。ルートの情報はweb上のいたるところにあふれ、それに関してはある程度イメージが付き既知なるものであったが、海外・長い氷河のアプローチ・6000m以上の高度・一ヶ月弱の長い登山期間はまったく未知なる世界であった。これらには相当苦しめられることとなった。不慣れな外人とのコミュニケーション・氷河上の昼と夜の激しい寒暖差・普段の半分しかない酸素など、未知の環境が身体に与えるストレスは予想以上であった。しかし、その分それらから得られたものも大きいのも事実なのである。私は帰国後、“どうだった？”という質問をよくされたが、それに対してはほとんど、“でかかった”と答えた。幅3kmもの河が日高より高いところに流れているのである。しかもそれが海につくのは何十万年後だ。そんなところを歩いているのだと自覚すると、自然の大きさに感動を覚えずにはいられなかった。ピークまでもとても遠い。日高でさえ現在では一番早いところで3時間、遅くとも2日あれば主稜線に達するのだが、ここでは早くても一週間はかかる。これらは日本では絶対に体験できない。20万の価値は充分にあった。

次に、本当はこちらの方が大きかったのかもしれないが、Roomの活性化ということがある。最近のRoomは“Room主義”的な山行が大部分を占めてしまっているような流れを感じる。ここでのRoom主義とは、基礎的技術伝達重視の、一年班のパーティーを継続して出すことに重きを置いている事を指す。なぜそうってしまったのかを改めて考える。最近ほどの山系も安定して新入部員を迎えられるようになってきたが、それまでは部員減少の一途をたどってきた。部員現象に伴い、趣向の違いから山行形体が変化したり、ピラミッド型の部員構成によって上級部員の負担が大きくなり、パーティーを組むことすらままならない。また、二年班の大きな計画を出すほどの余裕も技術も無いのだ。部員が多いほど、その部の包容力は増大し、いろいろなことができるようになるのだが、現在のRoomはそのような包容力を持ち合わせていない。そんな中で他の人と違うことを求めようとする（これは時代の流れによるものでもあり、Room主義的山行の反動でもある）、Roomという箱はそれを収めきれずに破綻してしまう。今まさにその前兆が見えてきているのである。Roomは個人主義であるとよく言われるが、個人が強くなりすぎるとそれに伴って組織というものはまとまらずに弱くなってしまふ。

それが表面化したものか、現在の他パーティーへの関心の低さは大いに問題となり得るものだと思う。以前部長から、山行の社会人化を指摘されたが、それだけにとどまらず、**Room** という組織自体にも社会人化の波が迫ってきているようである。

今山行はこれまで述べたようなことから、現役の、**Room** で行くことにこだわらなかつた。**Room** の可能性を確かめたかたつたのだ。結果、これからの **Room** を探るにはよい山行であったと思う。そこで、今後の **Room** の取るべき方向について考えてみたい。そのためにまず、なぜ個人として山及び岩に向かうものが増えているのかについて考えてみる。一つの理由に、**Room** ではできないというのが大きくあると思う。なぜできないのかというと、一番の理由はパーティーが組めないことだろう。山に求めるものが各々異なっていて、志向するものも違う。そんな中で、現在の **Room** のような小さな母集団からうまくパーティーを組むのはとても難しい。このことに関しては現状ではどうしようもない。徐々に **Room** の力（人数的にも技術的にも）を底上げしていくより他ないと思う。次に、センスの違いが挙げられる。**Room** として行く場合には、しっかりと計画の提出・検討によるパーティーの評価・報告の提出が責任として求められ、山の中でも計画の進め方に基づくしっかりと判断及びパーティーの安全確保が絶対である。しかし個人として、**Room** としてではなく行く場合にはそれらは不要であり、さらに計画に柔軟性を持たせられるといったメリットもある。検討では通らないような、大きなリスクが伴うような計画も誰に止められるでもなく挑戦できる。無論、責任は本人のみに帰せられるものであり、相応の心構えは必要であるが。ただ、退部後に勝手に行くのはその人の自由意思によるのであるが、**Room** に所属しながらそのような行動をとるものが頻りに現れてくるようになると、**Room** 全体へ、帰属意識の低下だけにとどまらず、構成員がパーティー及び **Room** に対して持つべき責任意識が低下してしまうという形での影響を懸念する。個人と組織では、責任というものの対象も大きさも全然違う。それをしっかりと認識した上で **Room** での活動は行われなければならないし、それが混同されるようになってしまうと非常に危険である。出発前、ある小屋ノートに、“自分勝手な行動”と非難する記述を見つけた。確かに夏山前の一ヶ月間日本を離れるのは勝手であると承知しているが、ちゃんと手順を踏んで、なるべく迷惑をかけないように準備をしてきたし、**Room** へ還元されるものも大きいと思っている。そのことについては **Room** への配慮はしていると理解してほしかった。今回の遠征もパーティー外からの目にはそのように、個人山行と同様に映ってしまっていたのかと思うと、すでに影響が出ているのかもしれない。

そろそろまとめに入る。近年、学生はカリキュラムの変化や学費の高騰により、簡単に留年するわけにはいかない。昔のように“学生=暇”といった等式が成り立たなくなっていて、毎日のように山に登る生活は送れないのである。また、**M** の面倒を見ることに手一杯で、新しいことや難しいことに取り組めないといった状況である。そんな中で **Room** の魅力について再考し、今後の運営及び山行の形体についてより活発な議論を望む。部報などを見ると、これまでも何度か同じような状況で様々な議論がなされてきたようであるが、雰囲気停滞している今がまさにそれに取り組まなくてはならない時期なのだ。完全個人主義にして、**Room** に対する責任を完全排除するか。部全体が一丸となって取り組むような対象を設定し、山に登る上での組織というものを徹底的に追求するか。進むべき道はいろいろと取れるのである。**AACH** とは言わずもがな、**Academic Alpine Club of Hokkaido** である。もっと **Academic** に考えてい

きたい。Alpinism を志向したい。最近はそれがどんどん薄まりつつあるように感ずる。今一度、なぜ山岳部に所属しているのか、なぜ山に登っているのかを考えてみよう。“そこに山があるから”などと言うものは何も考えていないのだ。

私はまとまった文を書くのが得意ではないが、ある程度は自分の意見を文字で表現できたと思っている。近頃の若者は自分の考えを主張することをあまり好まないようだが。今回のデナリ遠征によって、Room に新たな風が吹くことを願う。そして新たなスタイルでの遠征も実現できればと思う。

最後になりましたが、今回の遠征に協力してくださった方々、送り出してくれた Room の皆に感謝しています。本当にありがとうございました。

夏メイン入山前 田戸岡尚樹

## まえがき

北大山岳部部长 小泉章夫

2002年6月に現役部員3名の遠征隊がアラスカのデナリ（マッキンリー）峰に登頂した。本報告書はそのいきさつを各隊員が分担して著したものである。北大山岳部がこの頂に足跡を印したのは2度目である。かつて、1972年のマッキンリー隊は、登頂後、カヒルトナ氷河から稜線を北に乗越して、ペーターズ氷河、ムルドロー氷河と渡り歩き、日高方式の登山を実践した。それから30年を経た現在では、デナリ国立公園周辺の登山環境は整備され、4300mのキャンプには医者も常駐している。セブン・サミットを目指す登山者たちも加わって、シーズン中、その混雑は相当なようである。

とはいえ、一旦、天候が崩れて状況が悪化すれば、6000mを越える高所登山の厳しさはヒマラヤと何ら変わるところはない。1ヶ月におよぶ長期山行であること、国内では体験しえない氷河を抱く山塊の大きさは、現役部員達が日常行なっている山行の枠から大きく踏み出すものであったことは間違いない。また、4年目から2年目まで1名ずつの隊の構成では、リーダースタッフの心労はかなりのものであったろうと察する。予備日を含めた登山期間を一杯に使うことは国内の山行でもあまりない。今回、リーダーが高度障害を発症したにも拘らず、短期間に回復して登山期間内に全員で登頂できたのは、それらの緊張がうまく作用してセルフ・コントロールできたものだと想像するのである。

本文を読むと、隊員がそれぞれに、デナリの山行から感動を得て帰ったことがわかる。そのことを何より嬉しく思う。それらの経験と感情が、今後の部の運営や山行に反映されることを期待したい。最後に、この登山に関わって、かれらをデナリの頂に立たせてくれた学内外の皆さまに厚くお礼申し上げる次第である。

## 行動記録

5/27

今日から一ヶ月の旅が始まる。ルームで見送りを受けて、ごんc a rで千歳へ向かう。初の海外へは大韓航空で韓国経由の約12時間だが、着いてもまだ27日という時差マジックでこの日はとても長かった。でもちゃんと買出しはすませて、YHでパッキング。買った米の一部が玄米で萎える。

5/28

この日はちょっと街へ出て、午後にシャトルバスでタルキートナへ移動。荷分けをして終了。これで山に入る準備は整った。

5/29

レンジーステーションで手続きを済ませ、今日入山かと思いきやLPの天気が悪いらしく飛ぶことはできなかった。この日富山大4年の長坂心君に出会い、この先結構いっしょに行動することとなる。K2裏の東屋に天場る。

5/30

この日は **Maybe afternoon will be good.** だかで期待持たされたが結局この日も飛べず。この先 **maybe** に何度だまされたことか。村内観光や子供たちと遊んだりして時間つぶして沈。アメリカは里での生活が疲れる。早く山に入っちゃ良かった。

5/31

晴れ、777hPa

朝から晴れていたが、夕方になってやっと **OK** で飛んだ。セスナは怖い。あんな小さいのが良く飛ぶもんだ。パイロットのお姉さんもなんだか頼りなかった。

6/1

晴れ、776hPa→760hPa LP9:30—C1(7669ft)14:50

行動初日。荷物はザックに15、そりに25くらいか。カヒルトナ氷河本流への下りがそりを上手く操れずに苦労したが、そこからはただゆる～い登りを、踏み固められたトレール上を歩くだけ。約8.5km。氷河マジックの存在を確認できた。クレヴァスは開いていなかった。天気がよくて意外と楽しかったがいかんせん暑すぎ。体感温度は真夏並。すれ違う外人たちに声をかけられても“Hello”と微笑むことしかできない。

6/2

曇り→ガス、756hPa→697hPa C1/9:15—C2(9700ft)14:55

朝少し雪が積もっていた。今日もトレール上を行き、ski hillの登りにかかる。傾斜はさほどないが途中20cmくらいのオープンクレヴァスがヶ所あった。後はずっとトレール上に行く。デポ旗が近い間隔で打ってあって、トレールをはずすことはない。ホワイトアウトの中C2に着いた。

6/3

ガス→晴れ、697hPa→663hPa C2/10:30—C3(11000ft)12:50

C3までほんのちょっとの移動。ここは人が多い天場で、心さんと再会。少しスキーで遊ん

でみる。C2とそんなに変わらない高度なのに少し息苦しかった。Mは場所じゃんでやっと勝ったのに自ら入り口を選んだ。結局場所はこの後固定になる。

## 6/4

晴れ、661hPa→600hPa→661hPa C3/11:20—cache(13600ft)16:00/45—C3/17:55

まずはモーターサイクルヒルという少し急な斜面。上部で30度くらい。渋滞の中に混じって登っていく。ウィンディーコーナーはクレヴァス帯が横にあるが、トレール上は問題ない。食料をデポして下りる。途中までALはスキーで。下りはザイルをつなぐと難しいしうざい。この日下りてきた単独の女の人からガソリン少しと、肉、クリフバーをもらった。おれがもらったのにじゃんに負けてクリフバーは食えなかった。この女の方は10日で終わらせたいらしい。パワフルな女性だった。

## 6/5

晴れ時々ガス、663hPa→588hPa C3/11:35—cache16:45/17:30—BC(14300ft)19:25

いよいよBCに入る日。BCからが本当の始まりな気がする。最初の登りで外人Pを抜かして、いつも通り歩いていったのだが、Lは思うように動けずかなり消耗していた。cacheを掘り出して超スローペースでBCにたどり着いた。ここからは玄米とはおさらばで、インスタントライスの雑炊となるが、これまたまずい。食感が白米とは全然かけ離れていた。さすがに空気が薄い。

〈ここまで文責：田戸岡〉

## 6/6

休養日

起床 12 時。目覚めはさほど良くないが、昨日感じた頭痛は消えていた。今日は休養日で気持ちに余裕がある。塗り溜まった日焼け止めで顔が白くなっておりとても気になる。食事をした後BC内を散歩する。レンジャーテントを発見し天気について質問してみると、明日は雪だといっていた。散歩を終え、夕飯を食べ眠る。

## 6/7

晴れ、595hPa→546hPa→594hPa BC 10:50—ウエストバットレス上のデポ地(16200ft)15:20/15:50—BC 16:55

起床 7 時 40 分。飯を食べ出発。やはり朝の冷え込みはかなりのものである。黙っていると手足がじんじん痛んでくる。ぼくらの前にはかなりの数の先行パーティーがいる。ゆっくりゆっくり登っていくが、やはり 4000mを越える高度の中では、そのスピードでも息が切れてくる。途中 2ヶ所のクレバスを越え、fix ロープの取り付けまで行く。そこから 100mほど fix ロープを使い登る。傾斜は平均 45 度といったところだろうか。そこを上りきると視界が開けてきて、バットレス上に出る。稜線上は風がなかなか強い。バットレス上に出てすぐのところにデポポイントがあり、そこにデポし、来た道を下る。BCを上から見ると改めてその大きさに驚く。

6/8

ホワイトアウト、停滞、592hPa

起床 11 時 30 分。今日は風が強く、悪天のため停滞とする。近くにいた、富山大の人を招待して、ひたすらトランプにのめり込む。気付いた時には 19 時 30 分を回っていた。早々に飯を食い眠る。

6/9

ホワイトアウト→雪、停滞、589hPa

起床 7 時 40 分。風がわずかにあり、外を見るとガスがかかっているため 8 時 30 分まで時間待ちすることにする。その後も天気不安定のため、今日も停滞することにする。飯を食った後、残りの食料と燃料を確認してみる。その時分かったのが、燃料が恐らく足りなくなってしまうことであった。その対策について話し合った結果、行動水を冷たいまま持っていくということになった。その他にも、今後の行動予定を考え直す必要も出てきた。燃料に余裕がなくなったことで、みんなの心の中の余裕もなくなり始めていた。

6/10

晴れ→ガス、587hPa→666hPa、BC 10:00—C 3 11:40

[BC 10:00—デポ 12:30/13:20—BC 14:20/15:30—C 3 17:00]

起床 4 時 30 分。当初の予定では、今日はHCへ荷上げする予定であった。しかし、行動を開始してまもなく尚樹さんが体調不良を訴え、行動を中止。即レンジャーテントに向かう。1 時間ほど後戻ってきた。ドクターの診断は、“肺水腫”とのことで、一刻も早く高度を下げる必要があるとのことだった。ドクターの指示通り、テントを撤収して必要最小限のものを持ちイレブンキャンプを目指す。が、ザイルをウエストバットレス上にデポしているため、今後の事を考え馬詰さんがデポ回収に、自分が尚樹さんについて行くというふうに分かれた。イレブンキャンプに着き残りの日数を考え、もう本当に余裕の無いことに気付く。近くに日本山岳会の気象観測隊のテントがあった。彼らが着たからには今後好天が続くのだといていた。そうやってほしいものだと心から思った。

6/11

晴れ、668hPa→670hPa C 3 13:00—BC 16:15/17:20—C 3 18:15

起床 10 時 30 分。昨日荷下げした食料が少なかったもので、尚樹さんを残して二人で再びBCに向かう。今日はかなりのハイペース。途中、日本人の方に会い燃料を分けていただく。これで燃料不足の問題は解決した。その後もハイペースでBCまで。さすがに疲れた。下りはスキーで。結構パウダーではあったが、少し視界が無くなってきていた。モーターサイクルヒルはアイゼンで下りC3まで。疲れた。

6/12

晴れ、676hPa、休養

起床 11 時 30 分。外を見てびっくり、夜のうちに1 m以上雪が積もっていた。飯を食って

茶を飲み、交代で除雪をするがその後も永遠に雪は止むことなく降り続いた。雪の降り方も日本とはスケールが違うな—とつくづく感心してしまう1日だった。

### 6/13

快晴、678hPa→599hPa、C 3 12:15—BC 18:45

起床 9 時 30 分。今日は山に入ってから一番天気が良く、景色が最高に素晴らしかった。特に、ウィンディーコーナーから見るカヒルトナ氷河本流とフォーレイカには、皆見とれてしまった。最高の天気に皆の足取りも軽く、順調にBCに入る。BCで富山大の人を見付け話をすると、以前自分たちと共にBCにいた他の日本人の方達が、皆ピークアタックしていることを聞かされた。俄然やる気が出てきた。

### 6/14

晴れ、598hPa→531hPa、BC 12:30—ウエストバットレス上デポ地 15:40/16:05—HC (17150ft)18:00

起床 9 時 30 分。昨夜からテントの外では、風が凄まじい音を立てて吹き続けていた。朝方風が弱まり、HCに向け出発する。ウエストバットレスへの登りは、軽いラッセルをしたぐらいで特に問題なく通過。バットレス上に出ると、結構風が出てきて冷たく感じる。その後、デポを掘り出し稜線を行く。岩が出ている所もあり、かなり高度感があり緊張を強いられる。途中 2 箇所 fix ザイルがある。そうしてHCに到着。ここも雪ブロックの積まれた天場があり、使う。トイレもある。が、BCのものに比べてかなり汚い。ここは風が吹き抜けかなり寒く感じる。でも景色は素晴らしい。遥か遠く氷河の末端まで見え、感動ものである。

### 6/15

晴れ上部笠雲、532hPa、停滞

起床 6 時 40 分。風がかなり強く、デナリパスより上には、絶えずかさ雲がかかっている停滞。食料を 2 日分しか上げていないため、明日好天になることだけを祈る。今日、入山して初めて無線でレンジャーの天気予報を聞いた。それによると、明日から良くなるそうだ。期待して眠る。

### 6/16

快晴、532hPa→469hPa→599hPa、HC 8:05—デナリパス 9:25/40—summit14:00/40—HC 16:55/18:00—BC 20:00

起床 5 時 10 分。テントの外を見ると無風快晴。絶好のアタック日和である。早々に準備を済ませ出発。デナリパスへのトラバースには、しっかりしたトレールがあるが結構高度感がある。さらに日陰になっていたため、体を動かしていても手足が冷える。デナリ北峰を間近に望みながらデナリパスで小休止。ここから 100mほど登ったところに気象観測隊の測定器を見つける。ワイヤーだけの簡素なものだった。その後も、ひたすらもくもくと登り続ける。背に日の光を浴び、暑いくらい。高度のせいで、繰り出すその一步一步がとても重く感じる。息も続かない。アーチディコンズタワーを通過し、フットボールフィールドに出る。かなりだだっ広

いところだ。そして、ここから前面に最後の上り坂がそびえ立っている。150mはあろうか。上部の方は結構急になっている。そしてついにピークへ。皆喜び、感動し、絶叫した。ピークからの眺めは最高。果てしなく大小の山々が続き、そこに氷河や湿原が入り混じっていて、そして自分より高いものは何も無い独特の景色。ピークでの40分はあっという間に過ぎていった。それから来た道を下る。が、さすがに皆疲れた様子で、HCに着いた頃にはもうくたくたになっていた。それでも気力を振り絞り、テントを撤収し、BCまで降りる。高所での今日の長時間行動は、本当にきつかった。ピーク登頂祝いとばかりに、飯をたらふく食い、喜びを噛みしめつつ眠りにつく。

(ここまで文責:石川)

6/17

晴れ、596hPa→594hPa、R E S T

12時に起床。きょうも晴れだ。先に下山していった登研の方々に頂いた、食料を食べる。焼きそばはうまかった。その後、ウエストバットレスへの斜面でスキーをするなどして思い思いにのんびりする。

6/18

晴れ、592hPa→779hPa BC14:00—LP23:10

14時にBCを出発する。下りのそりを引きながらのスキーはやはり難しい。横にゴロゴロと転がったりするがC3に下るところには要領を得てきた。途中、ロープを持ったALが先に行き過ぎるということでLとALの間で口論となる。が、その場でおさめる。その後は、美しすぎる景色の中をスキーで快調に下る。幸せを感じた。C1から先はクレバスが多いのでロープを結ぶ。やはり、往きよりも格段にクレバスの量が増えていた。途中、Lが滑りにくいといってロープを外れる。夜も10時を回るとさらに美しくなる。静寂の中、時々両岸の雪崩の音を聞きながら歩く。23時10分L.P.に到着。長かった山行も明日セスナに乗って終了だ。

6/19

8時過ぎに起きるが大湿雪。テントの中でうだうだ。夕方にL.P.にいるみんなで滑走路の雪踏みをして滑走路を作る。その晩、もう寝ようとしていると今から飛行機がくるという。急いでテントをたたみ荷物をまとめて滑走路脇に立つが、今度は、飛行機は天気が悪く引き返したとのこと。ガックリ・・・

6/20

8時に用意して待てと言われたのにやはり飛ばないとのこと。ひどい。そしてその日は飛ばなかった。早くシャワーを浴びたい・・・

6/21

今日も天気は悪い。そろそろ最終下山日が迫ってきた。時差で日本のほうが1日早いし。というわけでセスナ会社のテントから小泉先生にその旨を国際電話で伝えてもらうよう頼む。ところが、後日わかったことだがその連絡はなされていなかった。K2はダメです。

6/22

快晴だ!!! やっと帰れる。やはりK2なかなか来なかったが、無事にタルキートナに到着。23日間のこの山での生活もやっと終わった。タルキートナの町ではひとつの事件が起きていた。デリピザが火事で焼失していたのだ。仕方

ないので昼はハンバーガーを食う。ウメー！夜はビーフステーキ、サーモンステーキ。ウメー！夜、町をぶらついていたら南裏さんと、加藤さんに会う。ブルガリア人や、キルギス人も一緒になってK2前のベンチで飲む。いろんな話を聞けて大いにモチベーションを刺激された夜だった。

#### 6/23

田戸岡はタルキートナに残り、石川と馬詰はシャトルバスでアンカレッジへ移動。アンカレッジで、心さんと再会。話が弾む。夜は、スーパーでステーキやカニを買ってユースホステル料理して大ご馳走。ウメー——！

#### 6/24

ユースホステルで自転車を借りて3人でサイクリング。海沿いに走る。気持ち良いが蚊の大群には閉口した。午後、心さんが隣の空き店舗に寝させてもらっているという **Fur Alaska** という店に行く。その店の主人のジャックさん（日本人の父親を持ち日本語が堪能）にいろいろお話を聞かせてもらう。しきりに英語の重要性を話してくれた。そして世界中に彼女を作れと。ジャックさんには日本の登山家、探検家が多くお世話になっていて植村直巳や、山田昇も名刺を置いていっていた。ぼくらの名前もその壁に貼らせてもらう。夜は、レストランでうまい飯をたらふく食う。ウメー……。深夜、タクシーで空港へ。心さんは国内線なのでここでお別れ。ぼくらは国際線ターミナルで、タルキートナから直接空港にきた田戸岡と合流した。

#### 6/25・26

ワールドカップの韓国の準決勝戦で盛り上がる中、大韓航空で、韓国経由で千歳へ帰国する。機内では爆睡していたのであつという間であった。空港に車で迎えにきてくれた澤田と、札幌へ。

（ここまで文責：馬詰）

## 装備

(文責：田戸岡)

今回デナリ峰は事前の情報通り、普段の積雪期用の装備で十分であった。他のパーティーもわれわれと大差ない装備であったと思うが、ほとんどの人がオーバーブーツを着用していた。われわれは予算上の都合、またそこまでの寒さ、例えて言えば層雲峡以上の寒さを想定していなかったため用意しなかったが、特にそれが必要と感じた行動はなかった。以下、今回の共同装備と個人装備を列記する。

### 〈共同装備〉

冬天 (ICI スタードーム3~5人用)、ストーブ (MSR ドラゴンフライ、ウィスパーライト)、ホワイトガソリン3ガロン (約11L)、漏斗、竹ペグ6、なべ、茶食器、スノーソー2、スーパーツェルト、デポ旗20、スキー修理具、ダックテープ、CB無線、φ9mm×50m ザイル

※テントはゴアで湿雪でも快調耐久性も高く1m近くの雪に埋められたときでもセーフだった。ストーブは時間短縮のため2台持った。ガソリンは山行中不足が懸念されたが足りた。茶食器は一回り小さい鍋の大きめのもの。この時期に、すべてテントで泊まるのであればスノーソーは使わなかったが一本はあるとよい。デポ旗はルート上残置が豊富にある。悪天でも行動するのでなければデポ用の数本でよい。ダックテープは粘着力が強くいろいろな場面で使える。CB無線はほとんど使わなかった。

### 〈個人装備〉 ☆微妙に個人差があるので執筆者のものを示す

お守り、ジャンパー (ゴア)、オーバースボン (ゴア)、毛シャツ、下着上下、フリースパンツ、ナイフ、コンパス、同予備、温度計 (壊れた)、地図、同予備、現金少々、ブキ、鏡、爪切り、赤軍手、オーバー手、高度計、カメラ2 (ばかチョン)、ネックウォーマー、ヘッドバンド、バンダナ、清純ハット、グラサン (パカパカ)、ゴーグル、ハーネス、スキー、ストック (3段伸縮式)、ピッケル、アイゼン、ビーコン、そり、そり積載用バッグ、そり結束用ゴム紐、ザック (約90L)、サブザック (約30L)、ビニール袋、漬物袋、ゴミ袋、生物分解性袋、トレペ、ライター2、ブキ予備、アイマスク、赤軍手予備、ハンガロン、同予備、筆記用具、記録及び日記用野帳、ラジオ、靴紐、日焼け止め、裁縫用具、ゆべら、櫛、目薬、目出帽、カラビナ4、環付き3、ロープマンII、スリング (60cm×2、120cm×2)、φ6mm×10m、水筒 (プラティパス1L+保温袋)、シュラフ (イスカ社製ダウン900g)、シュラフカバー、マット (リッジレスト、ふろマット)、frisbee、スコップ、コップ、食器、ピーボトル、靴下予備、フィルム (リバーサル36枚×7、ネガ24枚×3)、ビレージャケット (セーター代わり)、テントシューズ、コンタクトレンズ、メガネケース、ビタミン剤、鉄含有タブレット、双眼鏡、個人用薬品セット、非常用装備

お守りは気分的に必携。ジャンパー、オーバースボンは、下部や暑い日中は湿雪が降るので

ゴアテックス製の方がよい。地図は磁北が26度とかなり傾いているのでちゃんと磁北線を引く。貴重品はセスナ会社で預かってくれるが、私は一応現金を大二枚持った。高度計はあると便利だが、下部氷河ではちゃんとした高度補正が難しい。カメラは重要。ばかチョンは軽くてよいが、明るすぎるため感光しすぎてしまう。ポジフィルムを使う場合は影響が特に顕著である。いいカメラでフィルターがほしかった。私は日除け用につばの大きいハットの周囲に布をつけて下部氷河では使用した。サングラスは必携。無ければとても行動できない。ゴーグルはほとんど使用しなかった。下部ではつけると暑すぎ、また、眼鏡にうまくあわなかった。が、パウダーを攻めるときなどは有効かもしれない。ハーネスはBDのA b o dを使用した。使いやすいくてよかった。スキーは普通のジルブレッタ。外人は兼用靴にディアミールとか、テレマーク、スプリットボードなども見受けられた。スノーシューのパーティーが比較的多かったように思う。ストックは上部でも使えるところが多いが、中には滑落停止用のウィペット（BD製）をつけている外人もいた。スキーで攻めるときは使いそうだが、ピッケルに変えるか微妙な斜面でもこれがあると楽ができると思う。そりはLPで山積みになっている中からいいのを選んで使う。ぼくは長いテープがすでに付いてあったいいものを得ることができた。その荷物を固定させるのに自転車用のゴムの紐を使うとやりやすい。サブザックはアタック時とそりに使用。ゴミ袋と大使用の生物分解性の袋はレンジーステーションで手続きするときにもらえる。トレペは多めに持っていきましょう。ぼく以外は下山真近に切らしていました。アイマスクは無くても眠れないことは無いけど持っていくべき。日記は書くといろいろ考え事とかできるのでいいと思う。ラジオはだいたい入る。FM98.9MHzがおすすめ。ニュースは91.1MHz。日焼け止めはSPF50+のものを使用した。後半は面倒なのであんまりつけなかった。顔を真っ白にしている人も結構いた。ビナはこれでぎりぎりくらい。ロープマンはユマールより軽くてコンパクトでよい。無くてもよいがあったほうがより安心。スリングもこれくらいは必要になることもある。水筒は1Lでは少し小さかった。シュラフ、マットはこれで特に問題ではなかった。普段の山行では茶食器で回し飲みであるが、今回はコップを使用した。自分のペースで飲めるのと、ある程度は同量で分けられるため有効ではあるが、日本でもやろうとは思わない。ピーボトルはあると便利だが、私は用意したものがいささか小さかったため使わずに夜中でも外に出た。靴下はアタック時のみ新品の予備を使用した。フィルムは山の中ではポジを4本、ネガを2本を使用した。これはその人の写真への情熱次第。Mは天場ではジャージ姿でいたが、夜は結構冷え込むのでダウンジャケットがあるとうれしい。外人はみんなダウンをまとって外にずっと出ていたりした。テントシューズはかなり有効。外に出るときにオーバー手を上に履いて出たり、寝るときに履いたりした。ビタミン剤やタブレットは効いていたのかはわからない。何も使用していないMが一番元気だった。双眼鏡はほとんど使用せず。

## 食料

(文責：石川)

今回の山行での食料計画においての基本方針は、「普段の山行と変わらないもの」というものであった。そこで、朝は麺類、昼は行動食、夕は雑炊というのが基本的な献立となった。しかし、最長で約一ヶ月かつ高所での登山ということで、そのことを少し考慮に入れた。持参した食料を別表に記し、留意した点等を以下に記す。

### (1) 調理

高所においては、沸点の低下というのが問題であり、なかなか調理が難しい。そこで、BC(4260m)以上では朝はインスタント麺、夕はアルファ米をそれぞれ使用し、調理が容易に行えるようにした。アルファ米は軽量化という点においても良かったのだが、あまり美味しくないといい声もあった。

### (2) 水分

普段の山行では、特に水分を意識的に摂るといようなことは無く、食前・食後に決まって摂る程度であった。しかし、高度障害の対策として、水分を多量に摂ることが良いというのを聞き、意識的に摂るようにした。当初は4リットルを摂取するのが目標であった。そのため、行動中も水筒を携帯し、各自水分摂取に努めた。しかし、燃料の関係等から必ずしも毎日4リットルの水分を摂れたわけではなく、実際に4リットルの水分を摂ったのは数える程しかなかったように思われる。

### (3) 価格

普段通りなるべく低価格に抑えたかったため、行動食は全てくずビスケットが主となった。また、現地の食料品は、予想に反してあまり安くはなく、むしろ高いくらいであった。

### (4) 買出し

飛行機に積んでいける量が限られていること、また現地での作業をあまり増やしたくないことを考慮して、重量のかなりある米を除きほとんどの物を日本で揃えていった。また、肉類を持ち込めないというのが分かっていたので肉類を現地で買うこととした。

## 総括

はっきり言って今回の食料に関しては、失敗であったと思う。その第一には、現地で『ニコニコ米』なるものを玄米と知らずに買ってしまったこと。さらにそれをパッキング段階で、普通の米と混ぜてしまったことである。これは本当に悲惨であった。主食の米がまずいのである。第二に、食事のバリエーションが少なかった。皆の食欲を失わないように、味に変化をつけるだけではなく、献立自体に変化をつけるべきであった。買出しの方針は正解であったと思う。現地でほとんどの物を買っていたら、時間がかかるし、何より今回のように不注意で玄米を買うような致命的ミスが他にも起き、大変だったであろうと思われる。

## 献立表

	献立	回数
朝	ラーメン(インスタント)	1
	スパゲッティ	9
	カレーうどん(インスタント)	4
	うどん(乾麺)	3
	そば(インスタント)	4
	ひやむぎ(乾麺)	3
昼	くずビスケット、その他含む行動食+各自オリジナル	24
夕	雑炊(米 150g/人)	24

## 食料品リスト(日本で購入分)

品物	重量(g)	総計(¥)	備考
そば	364	660	インスタント
カレーうどん	400	500	インスタント
うどん	1500	553	乾麺
ひやむぎ	1500	527	乾麺
くずビスケット	10440	3300	
飴	772	1050	
チーズ	1520	1805	
乾燥ワカメ	100	295	
乾燥ガーリック	120	292	
高野豆腐	780	640	
乾燥きくらげ	30	350	
乾燥しいたけ	100	385	
乾燥切干大根	240	440	
雑炊味付け	2243	2260	7種類
粉末ミートソース	345	600	
粉末バジリコソース	112	480	
インスタントコーヒー	250	880	
ココア	1110	1035	
お茶パック	384	975	
砂糖	4000	480	
粉ミルク	1250	1350	
粉末スポーツ飲料	265	475	
だしの素	50	150	

かつをぶし	100	235	
インスタント味噌汁	580	290	
総計	28555	17542	

## 食料品リスト(現地購入分)

品物	重量(g)	総計(\$)	備考
ラーメン	400	1.29	インスタント
米	4700	8.08	
アルファ米	4500	11.98	
玄米	2000	3.99	誤って購入
スパゲッティ	4000	10.17	
ソーセージ	500	4.38	
ベーコン	1000	8.99	
醤油	200	2.59	
マヨネーズ	300	2.69	
レモネード	300	7.28	
総計	17900	61.44	

## 医療

(文責：石川)

今回の山行が普段の山行と異なる点として、

- ・高所であること
- ・長期であること
- ・外国であること

が挙げられる。中でも高所障害については、メンバー全員が未体験であり、OBの方々にご教授いただいたり、北海道海外登山研究会に参加したりしてその理解を深めた。

また、携行医薬品については普段より多少多めにもっていき、特別にダイアモックスなども付け加えていった。しかし、基本方針として、医薬品はなるべく使わないようにすることとした。

BC(4260m)に医師が常駐していることが分かっていたので、そのことも考慮に入れた。

## 総括

まず高度障害について。メンバー全員が4000mを越えたあたりから頭痛と息苦しさを感じ始めた。このうち1名が、BC(4260m)において軽度の高山病(肺水腫)にかかってしまった。医師の指示通り高度を3300mまで下げ、再び高所順応をやり直した結果、症状は改善された。(この時、医師の指示によりダイアモックスは使用しなかった。)原因は、風邪をひいたことによるものではないかと思われる。また、高所順応にもう少し日数をかけるべきであったのかもしれない。

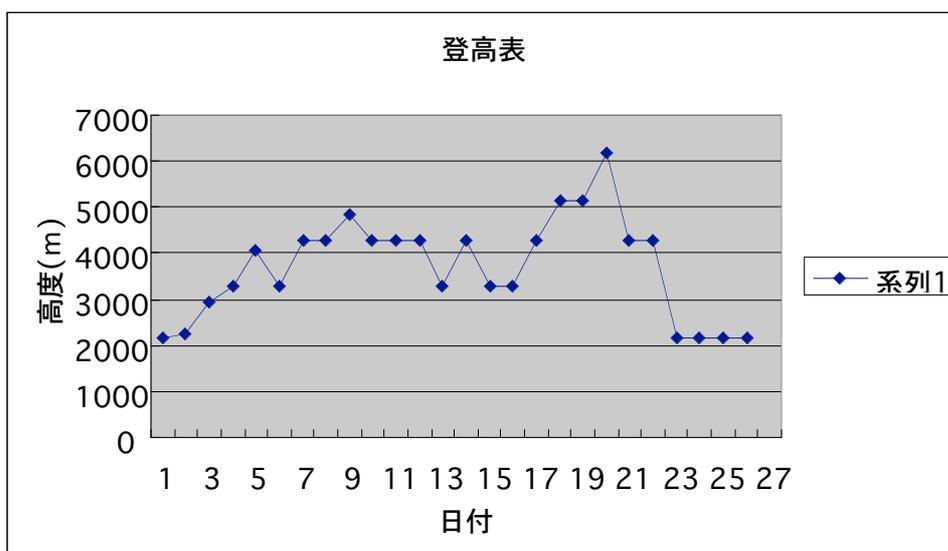
次に医薬品について。各自でビタミン剤などの栄養補助食品を持って行って使ったりはしたが、パーティーで持って行った医薬品は結局一つも使わなかった。

特に支障は無かったのだが、乾燥によって鼻血が止まらない者がいた。白夜対策にアイマスクを持って行って正解だった。

医薬品リスト

種類	品名	数量
鎮痛解熱剤	カンファタニン	1日3回14日分
	バファリン	1日3回14日分
	坐薬インダシン50	1日3回14日分
総合感冒薬	トーワチーク	1日3回14日分
鎮咳剤	ナルコチン	1日3回14日分
ペニシリン系抗生剤	アモキシシリン	1日3回14日分
抗生剤	トーワキサシ	1日3回14日分
止痢剤	ロペミック	1日3回14日分
整腸剤	コレポリーR	1日3回14日分
外用薬	湿布	14日分

	アルメS軟膏	14日分
吐気止め	坐薬ナウゼリン30	14日分
目薬	エコシリン点眼液	1
化膿止め	軟膏ゲンタシン	14日分
抗真菌剤	軟膏マイロゾール	14日分
利尿剤	ダイアモックス	14日分



## 渉外

(文責：馬詰)

今回は外国とのやり取りが主だったのでインターネットや E-mail が非常に役立ちました。また、英語力の必要性を実感する機会も多々ありました。

エアーチケット：大学の生協で購入。大韓航空、1ヶ月の Fix で 88750 円（空港使用料含む）。

セスナ会社：インターネットで他の登山記録や検索をして K2 Aviation という会社に決めました。その中で Classic climber's pack というアンカレッジからタルキートナまでのシャトルバス、タルキートナでの1泊分の宿、氷河までの往復のセスナ料金がまとめられたものを使用しました。料金は一人 425 ドルでしたが現地でグループディスカウントを求めたら一人 30 ドル減らしてくれ、結局は一人 395 ドルでした。感想としてはこの会社よりは、TAT (Talkeetna Air Taxi) のほうがサービスもよく、またちゃんと飛んでくれて良いと思います。

登山許可：現地のセスナ会社 K2 Aviation から、Fax で申し込み用紙を送ってもらいそれに記入後、Fax でタルキートナのレンジャーステーションに送りました。カードで 25 ドルの前払い、現地で 125 ドルを払います。つまり登山料はひとり 150 ドルです。

アンカレッジでの宿：セスナ会社の紹介でユースホステルに泊まりました。一人 19 ドル。他にも B and B などの一人 30 ドルほどの宿があります。

## 保険

(文責：馬詰)

保険については非常に苦労しました。大手の保険会社はほとんどにあたりましたが、大方断られ、また引き受けてくれた保険会社も掛け金が日動海上火災で13万、東京海上火災では、200万というありさまでした。出発直前になって東京のセブンエーという三井住友海上の代理店が引き受けてくれることがわかり、そこに頼むことになりました。

内容は以下のとおりです。

傷害死亡 1000 万

傷害治療 700 万

疾病死亡 1000 万

疾病治療 700 万

賠償責任 1 億

運動割増 A

期間は 2002 年 5 月 27 日から 6 月 26 日までの 31 日間

保険料の総額は一人あたり 17550 円

おそらく、運動割増をどのランクで組むかによって保険料が大きく変わるのだと思います。その点、本人自身もクライマーであるセブンエーは、よく理解してくれ妥当な保険を組んでくれたのだと思います。

ちなみにセブンエーの連絡先は

電話 0426-69-5330 Fax0426-69-5331 小日向さんという人が代表です。

## Live in Mt. Denali, Alaska for a month.

By Naoki Tadooka

5月27日。ついにアラスカに旅立つこの日が来た。この日のために数ヶ月前から多くの時間を費やしてきたのだ。初めての国際線は緊張のあまり(?)ビールを何度もおかわりし、スッチーに冷ややかな目で見られた。機内食は美味いと聞いていたけど、私はそれほどうまいとは思わなかった。量も少ないし、その分ビールにってしまったのであろう。韓国で乗り換え、時間をさかのぼってアラスカの地に着いた。はじめて生で見るアメリカはやはり日本とは違って新鮮だった。昔から、今まで行ったことのない場所に行くワクワクするのであるが、このときは違って、ドキドキしっぱなしだった。一人じゃなくて良かった。

買出しをして、シャトルバスでタルキートナへ向かう。町を少し出ると景色は一変して自然がいっぱいのアラスカンな雰囲気になった。遠くの山には残雪があり、カール状の地形が広がっていて、道の横には一様にカンバとトウヒしかなくて、奥に湿原がある所もあった。やはり私は熱帯林の鬱蒼とした雰囲気とかよりも北方林のどこか凜とした雰囲気のほうが好きだ。名前は同じでも石川直樹とはまったく逆の意見だ。ここは冬に来たらとてもいい感じなのだろうと想像する。オーロラとかがかぶったらもうたまらない。タルキートナに着き、荷分けをしてあとはセスナで氷河に降り立てば長い戦いの始まりだ。という我々の志気を萎えさせるかのように悪天で2日間足止めを食った。

5月31日入山。下部氷河は日高の林道とおんなじで、登りが始まる前のアプローチに過ぎない。が、慣れないそりや、氷河の輻射熱などに苦しめられて、C3に着くころには結構疲れていたのかもしれない。ここからいよいよ **horizontal** な移動よりも **vertical** な移動の割合が強くなる。“登る”という感覚が私のモチベーションを高めた。そして酸素分圧も地上の6割程度へとなくなっていくのである。しかしこの辺から、普段の北海道での感覚では行動できなくなってきた。BCに入った日はもうへろへろで、あんなにばてたのは2年目以来なかったと思う。ここにきてやっと丸一日休養の日。何もしなくて良いというのがとても幸せに感じられる。微熱もあり、調子は悪かったが、次の日の16000ftへの荷揚げは問題なくこなした。次の二日は天気がよくなって停滞だったが、このあたりでまた体調が下降線をたどるようになった。すこし呼吸に違和感があり、咳き込むようになったが、特にむくみ頭痛もなくそれほど苦しいわけでもなかった。最初は軽い風邪としか思わなかった。しかし結果的にそれは甘い考えだった。次の日HCまでの荷揚げに出たとき、一気に症状が悪化して出てきた。のどからんだ痰を出すと、血が混じったような色が付いていて、歩き出すと、体が自分の思うように動かなかった。やばい、肺水腫だ。

BCのメディカルテントに見てもらいに行くと、予想通り軽い肺水腫という診断だった。彼は、11000ftに下りて、数日休んでもう一度あがってくれば大丈夫だと言ったが、私はもう終わったと思った。私のためにパーティーをC3に下ろしてうだうだしては時間的にも天氣的にもピークはかなり遠ざかってしまう。どうするべきかいろいろ考えたが、どうにも混乱していて短時間でまともな判断ができたかわからなかったし、もうその時点で私に発言権は与えられていなかった。Lとして、常に余裕を持ち冷静に的確な判断をしなければならないのに、それ以前に自分の体調のことすらちゃんと把握できていなかったのだ。そんな自分が情

けなく、そして何より元気な二人に申し訳なくて、涙があふれそうになったが、サングラスがそれを覆い隠してくれた。結局C3まで下降し、回復させるべく2日間休養を取った。

そしてある程度回復し、再度BCに入ったが、ザックが軽かったこともあり、着いた時には疲労も無くて体調の回復を確信した。一旦底をついたモチベーションは一気に上がり、心はずでに6194mにあった。この時点で13日。残りは一週間程度であった。そして次の日。天気周期が良くなっていたので一気にHCまで上がってしまうことにする。さすがに全装ではつらい登りだった。風も少しあり、薄い空気をさらに薄く感じさせた。HCに入り、これ以上うえに泊まることはない。一泊した後も特に体調に変化はなかった。あとは一日。一日だけ上に登ればいいのだ。初めてのこんなに長い山生活。日本が恋しくてたまらなかった。

いよいよアタックの日。どうぞ登って下さいと言わんばかりの快晴無風のアタック日和り。どんどん体験高度を更新していく。そういえば私は旭岳の2000mちょいがいままで最高高度だった。それが今は、その3倍近い高さを目指して歩いているのだ。先行するMを追いかけるように、数歩に一回休みながら歩いていった。高度の影響か、普通に呼吸が苦しく、たまに横にふらついたりする。10キロもないようなザックが肩に食い込むように重く感じる。直下の数百mの登りでは、ふと気を抜いたら眠ってしまうのではないかというほどで、精神力だけで意識を保ち、足を動かしていた。そうしている間に、いつのまにか頂上に着いていた。全員で写真を撮って、叫んだ。今までずっと思っていたことをできる限り大きな声で叫んだ。結局日本までは届かなかっただけで、そろそろ下りようとした時、40分もそこにとどまっていたことに気づいた。後は下るだけだが下りも気は抜けない。なかなか思うようにペースをあげられず、前の二人にどんどん離された。HC。もうそのままシュラフにもぐり込みたかったが、もう食料はないし、BCの濃い空気で眠りたかった。下り、ウエストバットレスも気は抜けず、一步一步に気をつかった。長い一日を終えて、BCでやっと安心して落ち着くことができた。やはり全然空気が濃く、生き返ったような気分だったが、テントで体温を測ってみると38.1℃もあったのだ。そんなんじゃ消耗して当然だ。体調管理の甘さをここでも痛いほど感じた。

次の日の休養をはさんで、ついにLPへ下りる日が来た。一番長く滞在したBCともお別れである。荷分けじゃんで負けて、一番重い食料が当たってしまった。C3まではそりスキーじゃとても下れない。途中でスキーも引きずることにしたが、それでもそりが言うことを聞かなくて消耗。しかしC3より先ではきれいなターンはできないが、ボーゲンやシュテムターンを駆使しつついい感じで滑れて、やっとここまでスキーを上げた意味があった。氷河スキーの開放感は日本では絶対に体験できないすばらしいものだった。写真にうまく写らなかったのが残念だ。C1付近の氷河は、新しいオープンクレバスがばっくり開いていたりしてびっくりしたが私はそれほど怖いとは思わなかった。一応ザイルをつないで下りることになったが、スキーで滑りながらというのは相当な無理があった。私はその状況に耐えられず、こけた所でザイルを抜けた。このことがALに大きな衝撃を与えたい。反対だった私がそれほど考えずにコンテを受け入れてしまったのにも問題はあったが、このことに限らず、パーティー内の考え方の相違は今山行ではとても多かったし、大きかったと思う。それがアラスカでの一ヶ月間私にストレスを与え続けていた。体調を崩してパーティーに迷惑をかけてしまったという意識、また高度の影響で、強く主張できなかった自分にも多大な問題があったとは認識しているが、そ

ういった色々な要素が私に精神的孤独を与えていた。LPで今回の山行を振り返り考えると、いろいろなことが頭に浮かんだ。ここでタイミング良く、出発前からずっと左手首につけていた友人からのお守りが、山行の終わりに合わせるかのようにその役目を終えて切れた。このお守りは私のモチベーションをいつも高く保ってくれ、感謝の念が絶えない。

フライト待ちを終え、タルキートナで本を買い漁ったのち、一ヶ月の長い戦いを終えて帰国の途についた。帰国後は、一瞬で日常に引き戻されることとなる。報告書、卒論、院試、夏メインと、先月はずっと山にいたなんてことは考えられないくらいである。やはり山は刹那的な性質のほうが強いのだろうか。今はまだよくわからない。そのうちきっとわかるようになるだろう。

準山一メインのサイクルに縛られて、部の持続存続のため、技術伝達のための山登りが大部分を占めるようになっていく現状に嫌気が差した。自分が登りたい山に、自分が登りたいから登る。そんな純粋な山行を求めた。しかし、大学山岳部の上級部員として、リーダーとして山に行く際には常に責任とプレッシャーが付きまとう。魂を削りながら登るような思いで果たした頂上も、今思えば箱だけで中身の無い、登頂したという事実だけを求めてしまっていたのかもしれない。憧れを持って絶対に登りたいと思っていたピークも、いつしか立たなければ帰れない、面目がたたないという対象に変わってしまっていたのだ。ピークを踏みしめた瞬間に無意識のうちに流れた涙は、いったい何を思って流れた涙だったのだろうか。楽しんでこようと出発した山行を、純粋に楽しむことができたのだろうか。今後も上級部員としてパーティーを組んで山に向かう以上、またそういった自問自答をすることがあるのかもしれない。まだフライト待ちのLPで書いているから今はこんなことを考えてしまうのかもしれないが、下山後時間がたてば楽しき青春の1ページとしてきざまれることと思う。そうなることを願う。

どんなにつらい思いをしてもちょっと時間がたてばすっかり忘れてしまって、また行きたいなあと思うのが山に登る人たちの性質である。という自分もその一人で、また機会があったら氷河の山に行ってみたいと思う。それがいつになるかはわからないが。

一気に猛暑の札幌及び淋しきLPにて

## デナリ

馬詰 武

山登りの魅力のひとつに大きなフィールドで大きく動く、ということがあると思う。この山はそんな山登りにうってつけであった。雪のないアラスカの原野から突き上げる白い峰。果てしなく登らなくてはその頂に達しないというような感じになる山である。実際は着実に登って行けば意外に短時間で頂上に達するのであるが、氷河の錯覚か、果てしなく長い道程を歩いているように感じた。

山行を終えて残ったものは、意外にも登山がうんぬんというよりも、あの美しすぎる景色に対する感動である。夕暮れの中 L.P にむけ静寂の中歩いたカヒルトナ氷河は、夢の中にいるようであった。山登りの魅力をまたひとつ見つけることができた。

今度は夜空を見に行きたいと思う。



## デナリの思い出

石川 仁

「アラスカのデナリ峰に行こうと思うんだけど、隊員募集中です。」

そんな計画が、尚樹さんと馬詰さんから例会で発表されたのがすごく最近のような気がする。room から海外遠征隊を出すことがここ数年途絶えていたのでとても新鮮だった。その計画を聞いた瞬間、自分の中でまず最初に感じたことは「俺も行ってみたいな。」というもの。それから次に、「まだ一年も山をやっていないのに何を考えているんだろう。まだまだ自分には早すぎる。」という当然とも言える思い。この時点で自分はまだ一年目。装備に関しても、ろくに自分の物は持っていなかった。しばらく考えた。が、決断を下すにはそう時間はかからなかった。結局自分の本能のままに、ダメもとで隊に加わることになった。それから出発までの間、本当に色々な経験を積ませてもらった。

そして出発。何しろ日本を出るのもこれが初めてだったので、現地の町の中にも精神的に消耗していった。早く山に入ってしまいたいと思うのだが、セスナが飛ばない。いざ入山という頃には、もう精神が病んでいた。でもいざ氷河に入ってしまうと、そんなものは吹っ飛んでしまった。周りの山々は全てでかく、雪崩は頻繁に起こり、景色を眺めていると自分の距離感覚がおかしくなってくる。全てが日常とはかけ離れ、また日本の山とも違っていった。ただただ毎日が感動の連続。

ふと、入部して間もなくの春合宿のことを思い出した。山になんてそれまで行ったことの無かった自分にとって、その時のことは全てが新鮮で感動を覚えたものだった。特に、日常から離れた独特の感覚を味わえるのがすごく良かった。(そのうち、日常から逃れるために山に行くのではないかと、今はとても不安なのだが・・・)それから一年、色々山に行き、自然の恐ろしさや素晴らしさ、自分の小ささなどいろいろ感じる事ができた。今では、山に行き自分を見つめ直すことが病みつきになっている。

そんな感動を思い出しながら、毎日毎日上へ上へと進んでいく。クレバスや雪崩には何度恐怖を覚えたものか。でもそれ以上に怖い(?)というより嫌だったのは、人間関係の悪化のように感じた。長い間共に山に入っていると、相手のいいところが分かる反面嫌なところも否応なしに分かってきてしまう。普段の週末山行に行っているだけではわからないものが見えてきてしまう。本当に気心の知れた仲間同士ならそんな心配は要らないのかもしれないが、今回のパーティーは全くの縦割りパーティー。途中でパーティー崩壊なんてことも可能性としては0%ではないと思っていた。

そんなときに、尚樹さんが高山病にかかった。一時はどうなる事かと思ったが、逆にこれで士気が高まったように思う。「絶対にピークに行行ってやるぞ」と。

そうしてアタック当日。自分はもう何かに引き寄せられるかのように、歩いていた。空気の薄さで苦しいのだけれど、興奮して足が自然と前に出る。不思議な感覚だった。頂上に立ったとき、その興奮は最大となりぼろぼろ泣いてしまった。フォーレイカもハンターも自分から見下ろせる位置にある。ここまでに至った過程とこの眼下に広がる風景とを思

うと、涙が止まらなかった。

帰り、氷河の中で虫を見つけた。ハエのような小さな虫だ。こんな雪と岩だらけのところでどうやって生きているのだろうと不思議に感じた。

ランディングポイントで余計な3停滞を費やした後、セスナで帰途に着いた。白と黒の世界から、徐々に青や緑が加わったとき何故だかほっとしている自分がいた。

今振り返ってみると、今回自分は『生きている』ということを誠を感じていた。日々の形式化した生活から脱して、「明日何が待ち受けているのだろう」といった一種の期待を込めて毎日を送っていた。ただ流れていく時間に身を任せているのではなく、自らがその時間の中で、もがき苦しみそして積極的に働きかけていく。そうしてひたむきに過ごした時間にこそ、『生きている』という実感が湧くのだろうとつくづく感じた。

